

サルノ異類婚姻譚と「白猿伝」

西川 幸宏

はじめに

中国には古くから、若い女性がサルにさらわれ、子をも身ごもるといふ物語が伝えられている。『補江総白猿伝』（以下「白猿伝」）は、このサルと人との異類婚姻譚を題材にした文学作品の代表的なものである。

「白猿伝」は、人物や景色の描写など、修辞面においてかなり完成された文人の創作による文学作品でありながら、民間伝承としての要素も多く残している。本稿では、「白猿伝」の成立背景にあったであろう、こうした伝承の世界に目を向けることにより、民間伝承と文学作品の関係について考えてみたい。

「白猿伝」は文学史において、唐代伝奇小説として位置付けられているが、作者は不詳、成立時期についても、初唐説、中唐説などの見解が出されているものの、はっきりしたことは分かっていない。この作品に関して現在

確認できる最も古い記載は、『新唐書』芸文志、子類、小説類に「補江総白猿伝一卷」と記されるものであり、また『宋史』芸文志、子類、小説類には「集補江総白猿伝一卷」という記載が見える^①。

先ず「白猿伝」の物語の概要を記しておこう。

梁の大同年間の末、平南將軍蘭欽の別將であつた歐陽紇は長樂まで攻め入り、現地部族を尽く平定して更に嶮岨の地へと分け入った。紇は美しい妻を伴っていたが、土地の人から美人をさらう神がいるので気を付けるようにと忠告される。紇は兵士に陣営の見張りをさせ、妻を密室に入れて下女たちに守らせたが、果たしてその夜妻は何者かにさらわれてしまふ。紇は病を口実に軍隊を留め、妻を搜索することにした。

一ヶ月を過ぎた頃、小竹の茂みの中で妻の靴を片方発見した。更に十日余り、陣営から二百里ほど離れたところで、南に青山を望み、下に谷川の流れるところに着いた。川を渡ると、絶壁の上の竹林に紅い綾絹が見え隠れし、女の笑う声が聞こえる。蔓につかまって上に登ると、まるで異世界のような美し

いところに出た。紇が女たちに来意を告げ、話を聞いたところ、彼女たちは皆白猿の精にさらわれて来た者で、紇の妻もここにいることが分かった。女たちと力を合わせて白猿を退治することになった紇は、彼女たちの助言に従い、後日、酒と食用の犬、麻繩を調達して、また山に来た。

紇たちが隠れていると、申の刻ころ、山上から練り絹のようなものが降りてきて洞窟に入った。しばらくすると、身の丈六尺あまり、美しい髭を生やした男が、白衣をまとい、杖をつきながら、女たちに囲まれて出てきた。男は犬を見ると捕まえて食い、思う存分酒を飲み、その後女たちに支えられて去って行った。しばらくして女が呼ぶので、紇が洞窟の中に入ると、巨大な白い猿が寝台に手足を縛られて身もだえている。紇たちは白猿の急所である臍の下を刺し、白猿退治に成功する。白猿は死ぬ間際、お前の妻は俺の子を身ごもっている、その子は将来聖天子に仕えて一族を繁栄させるだろう、という言葉葉を遺す。紇は妻を連れ帰り、女たちを各々の家へ帰した。

一年後、妻は白猿によく似た男の子を生んだ。そ

の後、紇は陳の武帝に誅されたが、その子は紇と親交のあった江総に養われ、成長すると文学と書道に長け、名を知られる人物となった。

以上が「白猿伝」の概要である。主人公である欧陽紇は史書に伝記もある実在の人物で、その子欧陽詢は唐の太宗に仕えた書家、そして『藝文類聚』の編纂者としても有名な文人である。紇の妻が生んだとされる白猿の子が欧陽詢を指すのは明らかで、「白猿伝」の成立、執筆動機に関しても、このことが大いに注目されてきた。

「白猿伝」の研究で、これまで特に議論の焦点となってきたのが、成立時期や執筆動機である。執筆動機については、欧陽詢を誹謗・中傷するために書かれたとする説が有力で、この説は欧陽詢の容貌がサルに似ていたという逸話⁽⁴⁾によっている。

しかし近年、中傷説とは異なる側面からの見解も現れ、その多くは「白猿伝」を神人婚姻譚や民間伝承との関わりから論じている。⁽⁵⁾これらの見解を見ると、伝統的知識人の世界観だけから見ると中傷説に傾くのに対し、中傷説を否定するものには、「白猿伝」の持つ民間伝承的な要素に注目するものが多いことが分かる。

第一章 文言小説におけるサル

第一節 サルの異類婚姻譚

中国には、サルの異類婚姻譚をモチーフとする話が多く伝わっている。以下に幾つかその概要を挙げてみよう。

天台市の呉家の娘が婿選びをする年頃になった。ある日突然、亡くなった兄嫁が現れて、娘に侯將軍という人物との縁談をもちかける。娘は親の許可が必要だと断ったが、兄嫁は親の許しなど必要ないと言って消えた。娘はそれから精神が錯乱し、昼は眠り夜になると着飾ってどこかへ出かけるようになった。こうして一年、娘はやつれて人が変わったようになる。家族は巫にお払いをさせたが効きめはなかった。ある日突然、娘が明日將軍がやって来ると言った。期日になると盛大な結婚行列がやって来て、連れの男たちのほとんどが美丈夫だった。宴が終わると娘は車に乗せられて出て行った。呉はその後、寧先生という道士の噂を聞いて妖怪退治を依頼、寧先生说道術により妖怪が正体を現すと、それは巨大なサル

(原文「巨猴」) だった。妖怪が退治されると、娘はもとどおり元気になった。〔夷堅志補〕卷二十一「侯將軍」)

陝西の田舎に老婆が住んでいた。ある日、乞食僧に施しをしたところ、僧は老婆の家に怪異があることを言い当て、それを除いた。僧は、「妖怪が一匹逃げ出したようだ。二十年後に難事があったら、これを火の中へ投げ込みなさい」と言って、老婆に鉄の鞭を授けて去った。その後、老婆の娘が美しく成長したある日、大王という者が多勢の騎馬を率いて訪れ、鉄の鞭を見せるように言ったが、老婆は偽物を渡す。大王は鞭を返さずに、娘に酒を注ぐように言い、娘が断ると腹を立てて彼女を犯そうとした。老婆が鞭を火に投げ込むと、雷鳴が響き、しばらくすると数十匹のサル(原文「獼猴」)が撃ち殺されていた。そのうちの一匹は巨大なサルで、以前逃げ出した妖怪だと思われた。〔南村輟耕録〕卷六「鬼賊」)

明の嘉靖、隆慶の間のこと、ある役人の妻が妖怪に祟られた。妻は妖怪が来る度に目眩をおこした。

役人は妖怪を追い払おうとあらゆる方法を試したが、妖怪は去らない。そこで役人は、役所に道術の心得がある吏がいたので、妖怪退治を命じた。吏は道術を使って小さな壺に妖怪を捕らえた。妖怪は「自分は年をとったサル（原文「老猿」）で、湖広から長江を行き、北に上って金陵を過ぎ、こずえで休んでいたところ、この夫人がその下を通ったので色欲を起こし、彼女にとり憑いたのだ」と語った。吏が護符で壺の口を塞いで焼くと、その怪は途絶えた。『客座贅語』卷三「猿妖」

これらの話に共通しているのは、女性に危害を与えるサルが登場し、最後は退治されていることである。ここでは、サルは悪者であり人に禍を為す妖怪としてとらえられている。これらの話におけるサルへの態度には、女性に危害を与えるサルを憎み、蔑視する人々の感覚が表れていると考えられる。しかし、この種の話のサルに対する態度は必ずしもこうした方向ばかりではない。例えば次のような話がある。

蜀の西南の高山に、サルに似て背丈は七尺ほど、

人間のように歩き、人を追いかけるのが巧い生き物が棲んでいる。名前を猿国といい、馬化とか獼ともいう。道を行く若い女がいるとさらって行くが、人はそれに気付かない。山道を行き、その傍を通る人々は、長い縄で女の身体を引っばるが、それでもその害を免れることはできない。この生き物は男女を臭いで嗅ぎ分けることができ、だから女だけをさらい、男は気にもとめないのだ。女をさらうとそれを妻にし、家庭をつくり、子ができない者は死ぬまで帰らせない。十年経つと女の姿もサルのようになり、心も惑わされて、家に帰りたいとも思わなくなる。子ができた者は子と一緒に家に返すが、生まれた子は皆人間の姿をしている。子どもをちゃんと育てないと母親が死んでしまうので、恐れて、育てない者はいない。成長すると人間と変わらず皆楊という姓を名のる。今蜀の西南に楊姓が多いのは、大体皆、猿国馬化の子孫である。『太平広記』卷四四四「猿国」、出『搜神記』

昆明東南の国境外に女国がある。サルを夫とし（原文「以猿為夫」）、男の子が生まれると父親に似て

いる。山谷に入って、昼は休み夜に活動する。女の子が生まれた場合は洞窟に住む。『太平広記』巻八十一「梁四公」、出『梁四公記』

「猥国」ではサルに出会うことが災難と考えられているが、それでもサルは退治されず、避けることができない畏怖すべき存在として書かれている。「梁四公」でもサルは退治されておらず、サルに対する態度は否定的とも肯定的とも言えない。これらの二つの話で注目すべき点は、いずれもサルの子が生まれていることである。サルに対して必ずしも排他的ではない話があることは何を示しているのだろうか。

第二節 山怪伝承とサルの異類婚姻譚

サルが女性にとり憑いたり、女性をさらって子を身ごもらせるという話は、中国南方で多く伝えられている。これらの話は同じく中国南方で多く伝承される、山魈、木客などと呼ばれる山に棲む妖怪、いわゆる山怪の話とよく似ている。以下山怪伝承を見てみよう。

江南には山が多く、祟る妖怪（原文「禪鬼」）がい

る。岩石や樹木に祠を作り、地域によって、五通、木下三郎、木客、独脚五通など呼び名が違う。これらは記録に見える、木石の怪、夔罔兩及び山獠のことだろう。これらの山怪は、特に淫らなことを好み、士大夫、美男子、女の慕う相手、本来の姿、サル、犬、蝦蟇など様々な姿で女のもとに現れる。生殖力が旺盛で、これに遭った女は大抵が嫌がり苦しみに耐えられず、やつれて元気が無くなる。その後巫者となる女もいるが、病気になる者もいる。気を失い、倒れて死んだようだったのに、息を吹き返してから、「綺麗な部屋に高貴な人として楽しかった」と話す者もいれば、気が狂い性格が変わってしまった者もいる。祟られるのは美しい女とは限らず、神のお告げや前世からの契りなのである。ことが終わると、墨汁のような精液が残っていて、女の多くは子を身ごもる。

例えば、陳家の娘は嫁ぐ前に身ごもり、嫁いでから肉の塊を生んだ。娘は恐れてこれを地面に埋めると死んでしまった。翁十八郎の妻は身ごもって三年が過ぎて斗ほどの大きな塊を産み、それを谷川に棄てたが、まもなく死んだ。黄家の妻は夜に大きな

蝦蟇のようなものに迫られてこれと交わった。その後、臨月を過ぎてから青くてその父親と同類のものを生んだ。胡家の妻は身ごもったが子が生まれてこなかった。これを占った巫は、「神が娶ろうとされているのだ。どうしようもない」と言った。その後、果たして死んでしまった。丘家の妻は身ごもってから十年経っても生まれず、子は時々お腹の中で声を出した。母が家を出ようとすると、腹子はのぼり上がりその痛さは心を貫くほどで、家を出るのをやめると痛みは止んだ。その後一匹の血のように赤いサルを生み、野に棄てたが、幸い母親は無事だった。

『夷堅丁志』卷十九「江南木客」

婺州浦江の方家の娘が、嫁がぬうちに妖怪に祟られた。毎日昼過ぎになると着飾って床に就き、二時間ほどすると目を覚まして、嬉しそうな様子だった。道士たちが妖怪を退治しようとしたが、皆敵わない。方は召使いを貴溪（江西省）に遣り、竜虎山の張天師に訴えさせた。召使いが竜虎山へ到着したその日、娘のもとに二人の小役人が現れ、彼女を東岳の祠へと連れて行った。裁判官は娘に山魃と関わりをもつ

た経緯を告白するように言った。実は亡くなった叔父が山魃と彼女の仲人をしていたのだが、事前に口封じをされていたので、娘はその事を隠し、裁判官には妖怪の様子などを話した。裁判官は判決を下し、小役人に娘を送り返させた。この時娘は息を吹き返したが、すでに倒れてから二時間が過ぎていたのだった。娘は一年後に嫁いだが、なお処女のようにだったという。『夷堅丙志』卷十一「方氏女」

江北には狐魅が多く、江南には山魃が多い。山魃は閩や広東、広西に多くいて、人家に住みつき、人の婦女に淫らなことをする。『夷堅志』に記される木客が祟った時は、どうやっても追い払うことができないが、しばらくすると去ってしまうのだ。恐らく妖気も尽きることがあるのだろう。（『五雜俎』卷十五）

以上の山怪伝承と、先に挙げたサルの異類婚姻譚を比較対照してみる。先ず山怪とサルは共に好色である。木客は淫らなことを好み、山魃は人の婦女に淫らなことをする。一方、「鬼臧」ではサルである大王が酒を注ぐの

を断った娘に腹を立て犯そうとし、「猿妖」ではサル
の妖怪が役人の妻を見て色欲を起こす。姿についても
「侯將軍」のサルと木客がいずれも美丈夫の姿で女性
のもとを訪れている点が共通している。特に注目すべき
点は、木客がサルの姿をして現れるときもあることである。
山怪やサルにとり憑かれた女性の様子については、木
客に遭った女性は、「厭苦不堪、羸悴無色、精神奄然
(嫌がり苦しみに耐えられず、やつれて顔色が悪くなり、元氣
が無くなる)」、「僵臥不起如死(氣を失い倒れて起きず、死
んだようだった)」、「發狂易、性理乖亂、不可療者(氣が
狂い、性格が変わって治らなくなってしまった)」などと記
される。サルに魅入られた女性たちは、「猿国」では心
が惑わされて家に帰りたいと思わなくなり、「侯將軍」
では精神が錯乱して人が変わり、「猿妖」では妖怪が
やって来る度に目眩を起こした。「方氏女」では、山魃
にとり憑かれた娘が毎日昼過ぎになると着飾って床に就
き、二時間ほどすると起き出して嬉しそうだったと言
うが、「侯將軍」でサルにとり憑かれた娘が昼間は昏々と
眠り、日が暮れると着飾ってどこかへ出かけるようだっ
たことと共通している。また「江南木客」には、昏睡状
態から蘇った女性が、「綺麗な部屋で、高貴な人と過ご

して楽しかった」と話したことを記している。とり憑か
れた女性は苦しむとは限らず、楽しい時間を過ごしたと
感じることもある点には注意すべきである。

次にサルや山怪の子について見てみよう。「江南木客」
に記される陳家の娘と翁十八郎の妻の話では、二人とも
肉の塊のようなものを産み、それを土に埋めたり川に流
して棄てた結果死んでしまった。これは猿国との間に生
まれた子を育てないと死んでしまうことと共通する。ま
た、「江南木客」に記される丘家の妻は、妊娠して十年
も経ってから血のように赤いサルの子を産み、それを野
に棄てたが彼女は幸いにも無事だったという。この幸い
にも、という言葉は、異類の子を棄てれば母親が死ぬとい
う觀念があったことを逆に表している。また同じく、黄
家の妻は蝦蟇のようなものと交わって同類のものを産ん
だであり、これは「梁四公」に「サルを夫とし、男が生
まれると父親に似る」とあるのと共通している。異類と
の間にできた子はその父親と同類の姿で生まれてくるの
である。

この他、「侯將軍」では娘と侯將軍の仲人役を果たし
ているのが亡くなった兄嫁であり、「方氏女」では娘と
山魃の仲人をしたのが亡き叔父である。異類との婚姻は、

女性の親戚であり、且つ現世ではない世界の住人（故人）が仲介すると考えられていたことを窺わせる。

以上、サルの変類婚姻譚と山怪伝承に多くの共通点が見られることを、女性にとり憑く異類、とり憑かれた女性、異類との間に生まれた子、異類との婚姻の仲人、という四点から見てきた。特に異類との間に生まれた子を棄てると、母親が死んでしまうという点には注意すべきである。異類との間に生まれた子は特別な存在であり、生まれるまでに普通よりも長い時間がかかる。生まれた子を殺すことができないのは、異常であるからという否定的なとらえかたもできるが、逆に神聖な存在であるからと見ることもできる。これらの話のほとんどが中国の江南、西南部などの山間部を舞台にすることからも、両者が同じ土壌から生まれたものであることが窺われる。

第二章 山怪伝承と民間信仰

サルの異類婚姻譚には、サルに対して排除的な態度を示すものと、そうではないものがあることを先に確認した。これと同じことは山怪伝承にも見られる。「方氏女」の山魃は泰山の裁判官に裁かれ、『五雜俎』も山魃を淫

乱な性質を持ち、「百計を試みても追い払うことができない」と記し、いずれも山魃を否定的にとらえている。では「江南木客」はどうだろうか。

龔氏妻生子、形如人而絶醜惡、泊長、不畏寒暑、霜天能溪浴。

龔某の妻が産んだ子は、姿は人のようだが大変醜く、大きくなると、寒さや暑さを恐れず、霜の降りる寒空でも谷川で水浴びすることができた。

袁氏女、汲水門外井中、為大蛇繳繞仆地、遂與接、（中略）家人驚擾、召巫。巫云、是不客所為、不可殺、久當自去。

袁某の娘は、水を汲みに外の井戸に行き、大蛇に纏わり付かれて倒れ、これと交わった、（中略）家人が驚き騒いで巫を招いた。巫は言った、「これは木客の仕業だから、殺してはならない、暫くすれば自然に立ち去るだろう。」

これらの記載では、山怪の子を超人的存在としてとらえ、女性にとり憑く山怪を殺してはならないとしている。

「江南木客」にはまた以下のような記載がある。

所淫據者非皆好女子、神言宿契當爾、不然不得近也。とり憑かれるのは皆美しい女とは限らず、神のお告げや前世からの契りなのであり、そうでなければ近づくことはできないのである。

胡氏妻黃、孕不産、占之巫云、已在雲頭上受喜、神欲迎之、不可為也。果死。

胡某の妻の黄は、子を身ごもったが生まれてこない。巫が占って言った、「この女は雲の上で喜びを受け、神が娶ろうとされている、どうしようもない。」その後、果たして死んでしまった。

ここでは、異類が女性にとり憑くのは神がその女性を娶ろうとしているのだ、と述べている。こうした神としてよく知られているのが、江南地方で盛んに信仰されていた五通神である。

蘇州、松江の淫祠に五通神と呼ばれるものがある。怪しい巫がでたらめをでっち上げ、愚民たちはかた

くなにそれを信じている。蘇州府の西の楞伽山（上方山）では、五通の祭祀が数百年間も続いている。

遠近の人々が集まって、一日中飲めや歌えの大騒ぎ、男女入り乱れ、年中やむことがない。一年にかかる費用は相当な額になるだろう。更に憎むべきことは、若くて美しい娘が発熱や寒気を起こしたとき、「これは五通神が娶ろうとしているのだ」と言い、当の娘はぼんやりとして夢で神に会い、往々にして命を落としてしまうことだ。しかも家族はそれを悲しむどころか、光栄なことだと喜ぶのだという。（湯斌「奏毀淫祠疏」）

これは康熙二十五年（一六八六）年に、湯斌が康熙帝に五通信仰の弊害を訴え、その祭祀を禁止することを建議した上奏文である。このように中国の南方で、神が女性にとり憑き子を身ごもらせるといふ觀念が広がっていた。五通を信じる人々にとって神にとり憑かれるのは好ましいことであり、その子を身ごもることは光栄なことだった。五通は山怪とも関係が深く、「江南木客」にもあるように、両者は同一のものと思なされることもある。異類に対して受容的な態度には、この種の民間信仰を信じ

る人々の観念が表れており、逆に、異類に対して否定的な態度には、知識人である湯斌など、この種の民間信仰を外側から見た人々の観念が表れているのである。

知識人によってこの種の民間信仰や民間伝承が記録されるときには、その価値観や美意識によって加工されることがほとんどである。しかし稀に、こういった観念が原形に近い形で記録されることもあった。『太平広記』や『夷堅志』などの書物にはそういったものが見える。このことは、「白猿伝」の成立にも深く関わっていると考えられる。

第三章 「白猿伝」におけるサル

以下では第一章、第二章での考察をふまえ、白猿の最期、白猿の子、白猿の属性という三点から、「白猿伝」について検討を加える。

第一節 白猿の最期

さらわれた妻が白猿の洞窟にいたことを知った欧陽紇は、女性たちの助けを受けて白猿を退治する。

乃持兵而入、見大白猿、縛四足於牀頭、顧人蹙縮、求脱不得、目光如電。競兵之、如中鐵石。刺其膺下、即飲刃、血射如注。

そこで（欧陽紇らが）武器を持って入ると、大きな白いサルが手足を寝台に縛られていた。サルは紇たちを見てたじろぎ、抜け出そうするが解けず、目を稲妻のように輝かせている。（紇や部下が）競って切りつけたが、鉄石のようで歯が立たない。膺の下を刺すと、刃は飲み込まれるように入り、血が吹き出した。

白猿は死の直前、次のようなセリフを残す。

此天殺我、豈爾之能。然爾婦已孕、勿殺其子、將逢聖帝、必大其宗。

これは天が俺を殺すのだ、どうしてお前にそんな力があるう。しかし、お前の妻は俺の子を身ごもっている、その子を殺すんじゃないぞ。将来聖天子に出会って、必ず一族を繁栄させるだろうからな。

この言葉は白猿に英雄的な一面を与えているという指

摘がある。^⑩確かにこのセリフは項羽の次のようなセリフを想起させる。『史記』『項羽本紀』

此天之亡我、非戰之罪也。

これは天が俺を亡ぼすのだ、戦いの罪ではない。

天之亡我、我何渡為。

天が俺を亡ぼそうとしているのだ、どうして渡ることができよう。

つまり「白猿伝」のサルは、項羽と同じ英雄的な最期を与えられているのである。

後世、「白猿伝」の物語をもとに書かれたと考えられる文学作品が幾つか生まれている。『清平山堂話本』所収「陳巡檢梅嶺失妻記」（以下「失妻記」）、『剪燈新話』所収「申陽洞記」、『百家公案』所収「包公智捉白猴精」がそれである。これらの話におけるサルの最期と比較すると、白猿が英雄的な性格を持つことをより理解することができる。

「失妻記」^⑪は明代白話小説であり、文言の「白猿伝」より話はずっと長い。サルを退治するのは夫自身ではな

く道教の仙人紫陽真君であり、「白猿伝」では影の薄かった妻が、如春という固有の人格を得て、夫に匹敵するほどの活躍を見せている。

「失妻記」におけるサル、申陽公の最期はどのように描かれているだろう。如春の救出を乞われた真君は呪文を唱え、二人の天将を呼び出して申陽公を捕らえるよう命じた。

兩員天将去不多時、将申公一条鐵索鎖着、押到真君面前。申公跪下、紫陽真君判斷、喝令天将将申公押入酆都天牢問罪。

二人の天将は間もなく、申公を鉄の鎖に繋いで真君の前に引き立てて来た。申公が跪くと、紫陽真君は判決を下し、申公を酆都の獄に入れて罪を問うよう天将に命じた。

申陽公は道教の仙人紫陽真君によって裁かれ、酆都（地獄）の牢獄に送られる。しかし、申陽公の最期については何も記されていない。

「申陽洞記」^⑫は「白猿伝」と同じ文言小説だが、さらわれるのが主人公の妻ではなく、サルが集団化している。

また、物語は民話風で「白猿伝」とは違った雰囲気を持つ。

ここではサル最期のどのように描かれているだろう。李は自分は医者だと偽り、病に臥せる申陽侯に不老不死の仙薬だと言って毒薬を飲ませる。他のサルたちも薬を求めたので分けてやると、争ってそれを飲んだ。

有頃、群妖一時臥地、昏眩無知矣。生顧宝劍懸於石壁、取而悉斬之、凡戮猴大小三十六頭。

しばらくすると、妖怪たちは皆一遍に倒れて意識朦朧としている。李生は石壁に掛かっていた宝剣に気づき、それを執って妖ザルたちを悉く斬った。殺したサルは大小合わせて三十六匹だった。

ここでも、申陽侯は白猿のようなセリフを遺したりはしない。

明の白話小説『百家公案』「包公智捉白猴精」⁽¹³⁾のサル最期についてもみてみよう。

搶進洞中、見一大白猴醉倒在石床上。衆人用苧麻緊緊網了。洞中無限美器、被公牌收拾俱盡。先將妖怪

吊下、総共八位麗人逐一吊得下來。衆人歡喜、將猴精抬進開封府。

(韓節たちが)急いで洞窟に入ってみると、大きな白ザルが酔っぱらって石の寢床に横になっている。皆は麻をつかってサルをしっかりと縛った。洞窟の中は美しい宝物でいっぱいだったが、手下たちにすっかり取り尽くされてしまった。先ず妖怪を吊して下ろし、続いて合計八人の美女たちを下ろした。皆は喜び、サルの妖怪を担いで開封府へと入った。

そして開封の役所では、

包拯聞知捉得妖怪、昇堂審理。果見一箇白猴火眼金睛縛定、不能動。拯道、此異畜当即除之、休待其醒。分付取過降魔寶劍一把、親手斬下。忽聲響亮、堂下不見了妖精、唯有火光進起焰焰而沒。

包拯は妖怪を捕まえたのを聞き、審理すべく法廷に上った。果たして一匹の目を真っ赤にした白ザルが縛られて、動けずにいた。拯は言った、「この畜生をすぐに殺してしまおう、目が醒めるのを待ってはだめだ。」(そして包拯は)降魔の宝剣を持って

くるように言いつけ、自ら斬りつけた。たちまち叫び声が響き、法廷から妖怪の姿は消え、ただ火花が飛び散って消えた。

『百家公案』は、北宋の名裁判官包拯の様々な活躍を描く公案小説である。ここでのサルは包拯の活躍をひきたてるための悪役でしかなく、彼の手であっけなく退治される。サルが韓節によって捕らえられる場面などは、明らかに「白猿伝」を基にしているが、サルの最期に白猿のような英雄的要素は見られない。

以上三つの作品と比べてみると、「白猿伝」におけるサルの描かれ方が、他の話と異なることが分かる。

第二節 白猿の子

「白猿伝」では、最後にサルの子が生まれる。

紇妻周歳生一子、厥状肖焉。後紇為陳武帝所誅、素與江惣善、愛其子聰悟絶人、常留養之、故免於難。及長、果文學善書、知名於時。

欧陽紇の妻は一年後、サルによく似た男の子を産んだ。その後、紇は陳の武帝に誅殺されたが、紇と

元々親交のあった江総が、その子が人並み外れて聡明であることを愛し、いつも近くに置いて養育していたので、難を免れることができた。その子は成長すると、果たして文学と書道に長け、当時に名を知られる人物になった。

先述のように、この「子」が欧陽紇の子欧陽詢を指していることは間違いない。サルに似ているという事実そのものが持つマイナスイメージとは裏腹に、これらの記述は寧ろその子の優れた能力を称賛している。子が生まれるという要素は、サルに否定的な態度を示す「侯將軍」「鬼臧」「猿妖」「失妻記」「申陽洞記」「包公智捉白猴精」のいずれにも見られない。逆に異類に受容的な態度を示す「猿国」「梁四公」「江南木客」はこの要素を持っている。

異類への受容的態度は異類を神とする民間信仰によっていることを先に述べた。特に「猿国」の話の最後にある、「猿国の子孫たちが皆楊姓を名のる」という記載からは、サルを祖先として祀るトーテム信仰の存在を窺うことができる。サルのトーテム信仰については、他にもその存在を示唆するものがある。

道州の民である侏儒は、現在州城ではほとんど見られなくなったが、江華、寧遠の両県に最も多い。孫少魏が土地の者に尋ねたところ次のように語った、「侏儒はサル^⑭の氣に感じた女から生まれた者たちだ。サルは竹の扇の音を恐れるので、金持ちの娘は妊娠中寝る時、必ず下女に扇で腹を叩かせる、するとサルは恐れて近づかない。貧家の娘はこれができないので、そのまま寝てしまい、往々にして夢にサルがやって来て交わり、子が生まれると侏儒になるのだ。」両県は昭州、賀州に境を接しており、瘴氣の生じる土地である。山上にはサルが群を為しており、人を恐れない。その魂が人害を為すのである。『夷堅支景』卷六「道州侏儒」

これはサルと人の間に生まれた者が侏儒になるという話である。この一帯に住んでいた背の低い少数民族がサルの子孫であると考えられていたことを示すとも考えられるし、或いは彼ら自身がサルをテーマとする信仰を持っていた可能性もある。

二十世紀に記録された民間伝承には「不要花大姐^⑮」という話がある。

あるところに母と娘が二人で暮らしていた。母はいつも娘が早く嫁に行って、立派な人を夫にするようにと山神にお祈りしていた。ある日一羽の喜鵲が赤い紙をくわえて飛んで来た。これが仲人となり、娘は老ザルの精に嫁することになった。(後略)。

直江広治はこの資料に拠って、サルの異類婚姻譚について、「古くはかかる異類との婚姻は忌まるべきではなく、むしろ人間の側から望ましくさえ考えられていたものと想像されるのである。」と述べている。^⑮サルとの婚姻が望まれるのはサルが神として信仰されていたからであろう。このようなサルの信仰が「白猿伝」の背景にもあり、その結果、白猿の子が異能を持つ優れた存在とされたと考えられる。それでは、白猿そのものはこの作品においてどのように描かれているのだろうか。

第三節 白猿の属性

白猿は、とらわれの身となっていた女性たちによって次のように紹介される。

此神物所居、力能殺人、雖百夫操兵、不能制也。

ここは「神物」の棲むところです、その力は人を殺すことができ、百人の男が武器を執って戦っても、制することができません。

遍體皆如鉄、唯臍下数寸、常護蔽之、此必不能禦兵刃。

身体じゅう鉄のようですが、ただ臍の下数寸のところを、いつも守り覆っているの、そこはきつと刃を防ぐことができないのでしょう。

ここでは白猿が「神物」と呼ばれている。ここでも「神物」という語は解釈が難しい。この語は、『太平広記』所収の話では龍などの神獣に対して使われている。例えば『稽神録』に次のような話がある。

姚氏が漁をしていたところ、全身に長い毛の生えた黒い人のようなものが網にかかった。漁師が「これは海人だ。これが現れると必ず災いが起こるから殺せ」と言ったが、姚は「これは神物だから殺してはならない」と言い、「許してやるから、私のためにたくさん魚をよこしてくれよ」と言って逃して

やった。すると翌日は大漁で、例年の倍の魚が捕れた。（巻四七一「姚氏」）

また、『北夢瑣言』に出る話は、

ある子どもが蛇の首を縄で縛って連れて歩いてみると、蛇の頭が落ちた。すると雷雲がおこってその子は天へと引き上げられ、雷火で焼き殺された。子の背中には大きな字で「この者は安天龍を殺し、天神に誅されたのだ」とあった。葆光子は「龍は神物である。子どもとはいえずみやかに天罰が降されたのだ」と言った。（巻四二五「安天龍」）

「神物」とは、超常的な力を持つ、侵すべからざる存在を指す言葉として用いられていることが分かる。つまり、白猿も畏怖すべき存在であったということになる。

また、人を殺すことができ、男百人が武器を持ってかかっても敵わないほどの怪力の持ち主で、不死身だが一箇所だけ弱点があるとされる。これは、ギリシア神話のアキレス、北歐伝説のジークフリート、日本の弁慶や酒吞童子、中国では孫悟空などの英雄たちの特徴と一致す

る。

捕採唯止其身、更無黨類。⁽¹⁶⁾

女性を連れ去るのは白猿だけで、他に仲間はいなかった。

其飲食無常、喜啗果栗、尤嗜犬、咀而飲其血。

食べるものは普通の人とは異なっていて、果実や木の実を好み、特に犬が好きで、かみついて肉を食いその血を飲んだ。

半盡往返數千里。

半日で数千里を往復することができた。

白猿は一匹オオカミならぬ一匹ザルで、他に仲間がいなかったと記されている。これは「申陽洞記」の妖ザルが群を為しているのと対照的である。犬を好むという点については、「南蛮人」のイメージが付与されているという指摘があるが、常人と異なるものを食べ、半日で数千里を行き来することができるという描写からも、白猿の超人的性格がみてとれる。

白猿が威厳をもった存在として描かれていることは、「失妻記」のサル、申陽公の描写と比較するとよく分かる。

申陽公説与如春、娘子、小聖與娘子前生有縁、今日得到洞中、別有一箇世界。你喫了我仙桃、仙酒、胡麻飯、便是長生不死之人。你看我這洞中仙女、盡是凡間攝將來的。娘子休悶、且共你蘭房同室雲雨。

申陽公が如春に言った、「奥さん、私とあなたは前世からの縁があり、それで今日この洞窟に来ることができたのです、ここは別世界です。あなたは私の仙桃や、仙酒、胡麻飯を食べれば、不老不死になれますぞ。私の洞窟の仙女たちを見なさい、皆俗世からさらってきた者たちだ。奥さん悩みなさるな、ひとまず一緒に奥の部屋で楽しい時を過ごそうじゃないか。」

申公大怒而言、本待將銅鎚打死這箇賤人、如此無禮。為他花容無比、不忍下手。如此、交付牡丹娘子、你管押着他。將這賤人剪髮齊眉、蓬頭赤脚、罰去山頭挑水、澆灌花木、一日與他三頓淡飯。

申公は非常に怒って言った、「本来ならば銅鎚でこの愚か者を撃ち殺すところだ、まったく無礼なあまだ。ただこの女は花のように比類なく美しいので、殺すには忍びない。そこで、牡丹（女性の名前）に預けるから、お前はあの女を監督しろ。この愚か者の髪を切つて眉の高さにそろえ、髪をザンバラにし、裸足にして、罰として山頂に水を運び、花木に水をやらせ、一日に三度だけ粗末な食事を与えてやれ。」

申陽公告長老曰、小聖無能斷除愛欲、只為色心迷恋本性、誰能虎頂解金鈴。

申陽公が長老に言った、「私は情欲を断つことができず、ただ色欲だけのために本性は夢中になって、どうすることもできないのです。」

これらの描写からは、權威や尊嚴、神聖さは読み取れない。申陽公にはこのように俗な人間的性格が与えられ、卑劣な存在として描かれている。

白猿はまた、次のようにも描かれる。

少選、有美髯丈夫長六尺餘、白衣曳杖、擁諸婦人而

出。

しばらくすると、美しい頬ひげを生やした背丈六尺あまりの男が、白衣をまとい、杖をつきながら、女たちに囲まれて出てきた。

とられた女性たちは次のように言う。

所居常読木簡、字若符篆、了不可識。

洞窟にいる時はいつも木簡を読んでいたが、その字は道教のお札に書かれているような文字で、私たちにはよく分かりませんでした。

晴晝或舞双劍、環身電飛、光圓若月。

よく晴れた日の昼には二本の剣を持って舞い、稲妻が身体のまわりをめぐるさまは、丸くて月のようでした。

言語淹詳、華旨会利、然其状、即猥獍類也。

話すことは学識が深く詳細で、私たちの言葉も流暢に話しましたが、姿はサルでした。

旦盥洗、著帽、加白衿、被素羅衣、不知寒暑、遍身白毛、長數寸。

朝になると手や顔を洗い、帽子をかぶり、白い衿を着て、白い薄衣をはおり、寒暑を感じません。体が白い毛で覆われ、長さは数寸ありました。

人の姿をしている時の白猿は美しいひげを生やした長身の男であり、服装は白い衿に白い薄衣という白一色で統一されている。身体のみわりに稲妻がめぐって月のようだったという舞の様には、美しさとともに超常性が表れている。また、白猿は人間の言葉を話すだけでなく、学識を身に付けた知的な存在として描かれている。

ここに描かれた白猿は仙人的な要素を持っている。人里離れた山中で隠逸生活をおくり、⁽¹⁷⁾道教の護符にあるような難解な文字で書かれた木簡を読み、美しい頬ひげに白一色の神々しい姿をしている。また、美女に囲まれて暮らしている。これらは当時の士大夫たちの一つの理想にほかならない。つまり「白猿伝」のサルは、士大夫的な価値観によっても高く評価されうるものとして描かれているのである。そして、その子は士大夫としての優秀さを父親から引き継いでいるのである。

「白猿伝」におけるサルは、神聖さと威厳を持つ神としての面影を残す存在であり、かつ士大夫的価値観に合致する美しく知的な存在として描かれている。ここに「白猿伝」という作品の持つ特異性が見えてくる。それは、サルに畏敬的な態度を示す民間信仰のなごりを残しながらも、知識人の価値観と修辞技術を用いて書かれた作品であるということだ。

まとめ

—— 民間伝承から「白猿伝」へ ——

「白猿伝」という作品について考えるとき、この物語に登場する実在の人物のことを無視することはできない。⁽¹⁸⁾中根研一は、「白猿伝」の物語中に見える史実との差異をふまえながら、この作品の成立を欧陽氏三代と関連させて次のような見解を述べている。⁽¹⁹⁾(1) 白猿を退治する欧陽紇には南方少数民族を平らげる欧陽頤が、退治される白猿には南方少数民族が投影されている。(2) 欧陽紇に退治される白猿には、朝廷に反旗をひるがえし誅された欧陽紇自身が、白猿を退治する欧陽紇には彼を誅した宣帝の軍隊が投影されている。

つまり、欧陽紇の父欧陽頤が南方征伐に功があったことを理由に、「南蛮」の獸人の性格が与えられた白猿を退治するのに最もふさわしい人物として欧陽頤を当てて。同時に、南方の地で父の跡を継ぎ一大勢力を築いたが、陳の宣帝に疑われ、結局挙兵して誅された欧陽紇の最期に、白猿の次のようなセリフが相応することから、白猿に紇の姿が投影されているとする。死期を悟った白猿が女性たちに向かって悲しそうに言う。

吾為山神所訴、將得死罪、亦求護之於衆靈、庶幾可免。

俺は山神に訴えられてしまった。間もなく死罪を得るだろう。或いは、山の諸々の精霊たちに守ってくれるよう頼んでおいたから、免れることができるかもしれない。

中根はこのセリフについて次のように述べている。

「山神に訴えられ、死罪にならんとする白猿。しかしなぜ訴えられたのか、どうして死罪なのかという説明は一切ない。衆靈に援護を求めれば助かるかもしれないという台詞も意味が不明瞭である。だがこれを、朝廷に反逆

心あるを疑われ、配下の兵を集めて反乱を画策すること生き延びようとした史実上の欧陽紇の台詞と仮定すると合点がいく。」

「白猿伝」を欧陽氏との関係からみる見解は、これまで先述の欧陽詢中傷説や彼を嘲笑する逸話と結びつけるものがほとんどであった。白猿に欧陽紇の姿が投影されているというこの指摘は、この作品の核心部分に触れる重要なものと思われる。

欧陽頤や欧陽紇は、「白猿伝」の舞台である嶺南の地で広州刺史という役職にあり、その地を一族の拠点としていた。王夢鷗は「猥国」の子孫が名のる楊という姓から、「白猿伝」の作者が欧陽氏を連想したと指摘している⁽²⁰⁾。もし、この「楊」と「欧陽」が通じるとすれば、欧陽紇という個人にとどまらず、欧陽一族と白猿に関わりがあったことが考えられないだろうか。欧陽氏がサルと深い関係を有していたことを示すと思われる次のような話がある。

静江府の疊綵巖の麓に年をとったサルが棲んでいて、女性をさらう悪さをしていた。欧陽都護の妻もこれにさらわれてしまったが、彼は計略を使ってサ

ルを退治し、妻を取り戻した。サルのは洞窟に葬られたが、死んだ後も禍を為し、行く人があると石が飛んでくる。ただ欧陽という姓の者が来ると何もおこらなかった。『嶺外代答』卷十「桂林猴妖」

「白猿伝」とよく似た話で、妻をさらわれる人物の姓も欧陽である。特に話の後半、欧陽姓の者が通っても何もおこらないという。ここからも欧陽氏とサルに深い関係があったことが窺われる。あるいは欧陽一族はサルをトータムとしていたのではないだろうか。

欧陽一族がサルをトータムとしていたとしても、それだけでこのような信仰が知識人によって採り上げられ、記録されるわけではない。しかし、欧陽氏には知識人との交流もあり、そういった信仰が文字化される可能性も十分にあっただろう。「白猿伝」で欧陽氏とサルの異類婚姻譚が結びつけられた背景には、両者の間にもっと複雑な関わりがあったはずである。

【注】

- (1) 現在見ることで「白猿伝」のテキストには、『太平広記』卷四四四「欧陽紇」の條、明・顧元慶

『顧氏文房小説』、明・陶宗儀『說郛』に「白猿伝」と題して収めるもの等がある。近代以降では、汪璧彊『唐人小説』、魯迅『唐宋伝奇集』などにも収録されている。本稿では『顧氏文房小説』を底本とし、『唐人小説』、『太平広記』を参照した。

「白猿伝」の成立時期については、初唐・盛唐頃の早い時期に見る説と、中唐以前に遡ることはできないとする説の二つに大きく分かれる。見解が分かれる要因の一つは、これを六朝以来の志怪の要素を残した伝奇初期の作品と見るか、ほぼ完成された伝奇小説と見るかの違いによっている。また初唐・盛唐説の多くは、「白猿伝」を欧陽詢を中傷するために書かれたものとする立場に立つ。

北宋・晁公武『郡齋讀書志』卷九、伝奇類に、「述梁大同末、欧陽紇妻、為猿所窃、後生子詢。崇文目以為唐人惡詢者為之」といい、南宋・陳振孫『直齋書錄解題』卷十一、小説家類に、「欧陽紇者詢之父也。詢貌類獼猴。蓋嘗與長孫無忌互相嘲謔矣、此伝遂因其嘲広之。以実其事託言江総、必無名氏所為也」という。また、明・胡應麟『四部正譌』には、「白猿伝、唐人以謗欧陽詢者。詢狀頗瘦削、類猿猴、故當時無名子造言以謗之。此書本題補江総白猿伝、蓋偽撰者託総為名、不惟誣詢、兼以誣総。噫、亦巧矣」という。

この説は現代にいたるまで影響が強く、魯迅の『稗辺小綴』や汪璧彊の『唐人小説』もこれを踏襲している。魯迅は「小説を偽りて誣蔑を行う風潮は、その由

(4)

来が頗る古いことが知れる」(『中国小説史略』)と述べ、『隋唐嘉話』にも見えるように、唐代には詩を作って相手を嘲笑することが行われ、「白猿伝」もこういった風潮の中で生まれた作品だと解釈する。また、近人の中傷説をとるものには、張長弓、王夢鷗、卞孝萱などがある。

唐・劉餗『隋唐嘉話』巻中に、「太宗宴近臣、戲以嘲謔。趙公無忌、嘲歐陽率更曰、聳膊成山字、埋肩不出頭、誰家麟閣上、畫此一獼猴」という。ほぼ同じ話が、唐・孟榮『本事詩』嘲戲、『太平広記』巻二四八「長孫無忌」にも見える。『太平広記』巻四九三、「歐陽詢」に、「文德皇后喪、百官縗經。率令歐陽詢狀貌醜異、衆或指之。中書舍人許敬宗見而大笑、為御史所劾在授洪州司馬」という。ほぼ同じ話が、唐・劉肅『大唐新語』巻十三、『新唐書』巻二二三「許敬宗伝」にも見える。

(5)

乾一夫は、「白猿伝」の原形は民間説話にあり、異類との間に生まれた子は世に傑出した才能を持つという説話的世界観の法則に則ったものであると考える。そして、作者が不明なのは、共同の遺産として語られ、採録した者も自己の名を冠することをばかったためだとする。乾とはほぼ同じ説をとるものに、王枝忠、松崎治之らがいる。成行正夫は、近年四川省で発掘された後漢代の画像石にサルを退治する物語が見えることを挙げ、これが「白猿伝」のもとになったと考える。更に、白猿が山神的性格を持つことを述べ、白猿伝説

(6)

がもとは神人婚姻の物語であった可能性を指摘する。なお、その他の見解として、この作品を完全なフィクションとしてとらえるものがある。内山知也は、物語中に史実と異なる部分が多いことなどを指摘し、多くの説話をもとに白猿の新しい形象を創造したものである。中根研一は、歐陽一族の史実と南方に伝わるサルの伝承を結びつけた作品で、白猿には「南蛮」のイメージが反映されており、製作目的は小説の純粹な虚構としての面白さを追求したものである。

以下、サルや山怪の伝承については全訳を用意しているが、紙幅の制限があるため、今回は概要のみを挙げよう。

(7)

『太平広記』巻四四四、畜獸十一、猿上、「猢猻」(引『搜神記』)

蜀中西南高山之上、有物與猴相類、長七尺、能作人行、善走逐人。名曰猢猻、一名馬化、或曰獼。何道行婦女年少者、輒盜取將去、人不得知。若有行人經過其旁、皆以長繩相引。猶故不免。此物能別男女氣臭。故取女男不知也。若取得人女、則為家室、其無子者、終身不得還。十年之後、形皆類之、意亦惑、不復思婦。若有子者、輒抱還其家、產子皆如人形。有不養者、其母輒死、故懼怕之、無不敢養。及長、與人不異、皆以楊為姓。故今蜀中西南多姓楊、率皆是猢猻馬化之子孫也。

資料【サル】の異類婚姻譚と山怪伝承における地域の一致【参照】。

(8)

五通神については、『聊齋志異』巻十に「五通」と題

(9)

(10)

する話が見える。また、澤田瑞穂『中国の民間信仰』『孫悟空神』では、「猻国」や「侯將軍」、「鬼賊」などの話を引き、これらのサル的好色性が「五通神」と共通していることを指摘する。

例えば松崎治之は、「白猿の遺言に至っては、妖怪のイメージを一掃させて、英雄や偉人のそのように変貌せしめている」という。（『唐代小説』『白猿傳』小考）

(11)

宋の徽宗の宣和三年、東京に住む陳辛は進士に及第して広東巡検に任命され、妻の如春を伴って召使いの王吉と三人、任地に赴く。仙人の紫陽真君が、如春に災難の相があるので、道童の羅童を三人のお供に付けるが、羅童が駄々をこねたので、如春は羅童を帰してしまふ。その後一行は梅嶺の山中にある旅の宿に泊まるが、実はこの宿はサルの妖怪申陽公がしかけた罠で、如春は申陽公にさらわれてしまふ。申陽公は彼女に迫るが、如春は決して身をまかせようとしない。腹を立てた申陽公は如春に山の草花の水やりという罰を与える。陳辛は任地に赴き着任したが、如春の消息は知れない。任期を終えた陳辛は、都への帰路に立ち寄った紅蓮寺の長老から、梅嶺で草木の水やりの罰を受けている如春のことを聞き、夫婦は三年ぶりに再会する。しかし、如春は申陽公の妖術から逃れられないため、陳辛は仕方なく寺に戻り、長老に相談して申陽公が紫陽真君を恐れていることを知る。陳辛は紫陽真君に如春を救ってくれるよう嘆願し、申陽公は真君によって

(12)

成敗される。夫妻は無事に再会を果たし、都に帰って百歳まで添い遂げた。（概要）

元の大暦年間のこと、隴西の李徳逢は知人を頼って桂林へ行ったが、知人は既に亡くなっており、故郷にも帰れず流浪の身となった。近隣の豪家に錢翁という者があり、娘が行方不明になっていて、娘を見つけた者には財産の半分と娘をやるかと触れていた。李は弓の名人だったが、ある日ノロジカを追って山深く入り、日が暮れたので古廟で夜を明かすことにした。夜になると妖ザルの群れがやって来て、李はその首領格のものを射た。翌日、血の跡をたどって行くと大きな穴に続いており、李は誤ってその中に落ちた。穴の中を進むと、「申陽の洞窟」という立て札があり、妖ザルの住処だった。李は門番に自分は医者だと偽って、李の矢に当たって臥せていたサルの首領申陽侯に会い、不老不死の薬だと言って毒薬を飲ませた。また、手下のサルたちにも同じ薬を飲ませ、捕まっていた錢翁の娘らを助け出した。この洞窟はもともと鼠の精の住処だったのを妖ザルが奪ったものだった。鼠の精はサルを退治したお礼に李たちを洞窟から出してくれた。李は娘たちを錢翁の家に連れて帰り、三人の娘を皆嫁にもらって、大金持ちになった。その後洞窟のあった場所に行ってみると跡形も無くなっていた。（概要）

東昌府の南に住む周慶玉は寧陵県長官に任命され、妻の柳氏を伴って任地へと赴く。途中三山駅で夜を明かすが、翌日になると妻の姿が消えている。村人による

(13)

と、駅に近い申陽嶺には美人をさらう妖怪が棲んでいるとのこと。周は嘆いたが、ひとまず任地に赴く。周は仕事で開封府に赴き、上司である府知事の包拯に面会したおり、妻のことを相談、包拯は彼女の捜索に当たったことにした。包拯は街で捜索を続けるうち、樹木に囲まれた古寺を発見、ちょうど寺の住職を訪ねて来たサル、妖怪申公を知り、周の妻が申公にさらわれていたことを突き止めた。役所に戻った包拯が申陽嶺の妖怪の住処に関する情報を募ると、獵師の韓節が山中の崖の上に申公の棲む洞窟があることを知らせた。韓節は小人を従えて洞窟に行き、申公を捕らえて開封府の役所へと連れて来た。包拯は酒に酔って眠っている申公を降魔の宝剣で斬りつけ、周夫妻は無事再会して共に寧陵へ帰る。申公の洞窟から助け出された女性たちは皆家に帰されたが、陝西の董家の娘は故郷が遠く身寄りが無かったため、包拯のはからいで韓節に嫁ぐことになった。(概要)

(14) 米星如編『吹簫人』所収。

(15) 直江広治『中国の民俗学』十八頁。

(16) 陳珪は「捕探唯止其身」の「捕探」について、女性を害して生命を延ばす道術のこと「採捕」、「採戦」ともいう)であると解釈している。(陳珪「補江総白猿伝」文中所蘊道教色彩考)

(17) 白猿と道教の関係については陳珪に研究がある。前掲論文参照。

(18) 「白猿伝」の物語と史実との間に少なからぬ差異が見

える点については、内山知也に詳細な考察がある。内山知也「補江総白猿伝」考」参照。

(19) 中根研一「補江総白猿伝」の成立をめぐる「考察」参照。

(20) 王夢鷗「閑話「補江総白猿伝」」参照。

(21) 楊憲益は、この「桂林猴妖」の故事が「白猿伝」と似ており、より民間伝承に近い形をとるため、「白猿伝」の原話と考えている。そしてこの故事中に見える欧陽都護という人物の役職に注目し、安南都護府ができるのが唐の調露初年(六七九)以降であることを指摘して、この故事をもとに書かれた「白猿伝」の成立もそれより前には遡れないため、その成立時期は中唐以降であると主張する。(楊憲益「關於《白猿伝》的故事」)

(22) 「白猿伝」は「補江総白猿伝」ともよばれる。江総は六朝時代の文人で、梁、陳、隋に仕え、いずれの王朝でも高官を得た人物である。「補江総白猿伝」とは、江総の「白猿伝」を補うという意味であり、原作「白猿伝」の著者が江総であるとされるのは、彼と欧陽紇、欧陽詢父子の間に交流があったという史実に基づいている。『新唐書』『欧陽詢伝』参照)

サルの異類婚姻譚と山怪伝承における地域的一致

資料	話の名前（内容）	舞台となる地域
『夷堅志補』巻第二十二	「侯將軍」	天台市（浙江省）
『南村輟耕録』巻六	「鬼賊」	陝西
『客座贅語』巻三	「猿妖」	湖広（湖北、湖南省）長江、金陵（南京）
『太平広記』巻四四四、 畜獸十一、猿上 （引『搜神記』）	「猯国」	蜀（四川省）の西南
『太平広記』巻八十一、 異人一、（引『梁四公記』）	「梁四公」	昆明（雲南省）
『夷堅丁志』巻第十九	「江南木客」	大江以南の地（江南） 二浙（浙江）、江東、江西、閩中（福建）
『夷堅丙志』巻第十一	「方氏女」	婺州、浦江（浙江省）
『五雜俎』巻十五 事部三	「山魃の話」	閩（福建）、広東、広西
湯斌「奏毀淫祠疏」	「五通信仰」	蘇州、松江（江蘇省）
『夷堅支景』巻第六	「道州侏儒」	道州、江華、寧遠（湖南省）
『嶺外代答』巻十	「桂林猴妖」	桂林（広西）
『清平山堂話本』	「陳巡檢梅嶺失妻記」	広東
『剪燈新話』	「申陽洞記」	桂林（広西）
『百家公案』第五十一回	「包公智捉白猴精」	寧陵（河南）
「補江総白猿伝」	「白猿の話」	長楽（広東 or 広西 or 福建）

【参考文献】

〔著書〕

米星如編『吹簫人』商務印書館、一九二九年

直江広治『中国の民俗学』岩崎美術社、一九六七

中野美代子『孫悟空の誕生 サルの民話学と「西遊記」』玉川

大学出版部、一九八〇年

澤田瑞穂『中国の民間信仰』工作舎、一九八二年

〔論文〕

楊憲益「關於『白猿伝』的故事」、『人民日報』、一九五七年

四月二日 第八版

近藤春雄「唐代小説について——古鏡記・白猿伝——」

〔愛知県立女子大学・愛知県立女子短期大学紀要「語

学・文学」第十三号、一九六三年〕

内山知也「『補江総白猿伝』考」〔内野博士還暦記念『東洋学

論集』、一九六四年〕

乾一夫「補江総白猿伝論——その創作動機・目的論をめぐ

る管見——」〔『國學院雜誌』第七十一卷、第九号、

一九七〇年〕

成行正夫「『白猿伝』の系譜」〔『芸文研究』第三十三号、一

九七四年〕

王夢鷗「閑話「補江総白猿伝」」〔『中外文学』第三卷、第八

期、一九七五年〕

王枝忠「『白猿伝』写作動機弁」〔『人文雜誌』第五期、総第

四九期、一九八七年〕

卞孝萱「『補江総白猿伝』新探」〔『西北師大学報』社会科学

版、第二十八卷、第三期、一九九一年〕

松崎治之「唐代小説『白猿傳』小考」〔『筑紫女子短期大学紀

要』第二十八号、一九九三年〕

中根研一「『補江総白猿伝』の成立をめぐる一考察」〔『饗養』

第五号、一九九七年〕

陳珏「『補江総白猿伝』文中所蘊道教色彩考」〔『初唐伝奇文

鈎沈』上海古籍出版、二〇〇五年〕